



早急な対策が必要な 勤務医支援

北海道医報通信員
江別医師会 副会長
平賀内科クリニック 院長
平賀 俊 尚

江別市の地域医療の話題といえば、2006年の「江別市立病院内科医総辞職問題」が最初に思い浮かぶ。その後、同様な事象が全国で起き、病院勤務医の勤務状況がいかに厳しいものであるかが社会的に問われる端緒となった。限られた人材と予算で24時間、しかも一年中、二次救急を引き受けることが勤務医にどれほどの負担になっていたかを、当事者以外、誰も気に留めていなかった。勤務医が家にも帰れない状況を、解決しようとする具体的な動きはまったくなかった。この行き詰った状況に対し、ひとりが辞めると言えば、残る者はさらに状況が厳しくなるのは自明で、次々と辞職願を出すのは当然の結末であった。事が問題化した後も、医局・行政ともに対策が遅れた。というのは折からの開業ブームと2004年4月の「新医師臨床研修制度」導入が原因となって、医局には応援に出せる医師がいなくなっていた。また、行政も以前から言われていた夜間診療所を市立病院から分離するなどの対策案を早急に実施することができなかった。

病院の勤務医不足の原因は「新医師臨床研修制度」のもとに救急医療の力となる若手研修医がいなくなった結果、中堅医師に過度の負担がかかったことにある。

江別市には現在、5病院と58診療所がある。内科に限っても、私が開業した14年前の倍以上の診療所が新規開院している。皆その院長は、病院勤務医として第一線で活躍していた医師たちだ。そして現在も江別市やその近郊では、新規開業が続いている。今や国公立・私立に関係なく、どの病院にとっても優秀な勤務医の減少は深刻さを増している。

現在、江別市立病院内科は週1回のみ、夜間二次救急患者を受け入れ、内科の午後外来は休診している。したがって救急患者の札幌圏の病院への依存度は高く、市民から不満の声も聞こえるが、勤務医を過労から守るためには現状では致し方ないことと思われる。

早急に「勤務医支援」について、医師会も積極的にかかわっていく必要がある。



蕎麦打ちの会

江別医師会
ゆきざさ循環器内科 院長
佐藤 文彦

江別市内で開業して間もなく3年になります。この間、江別医師会所属の病院・診療所の各先生と病診連携、診診連携などで本当に助けていただき、ここまでやってこられました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

この3年の間で仕事以外での私自身で一番の出来事は、これまで趣味らしい趣味と言えるものがなかった自分が、本当に楽しく参加できるものを見つけたことです。それは、蕎麦打ちです。写真は江別市にある『杜の蕎麦屋 コロポックル山荘』さんで、毎月一回開かれている蕎麦打ち教室でのものです。1年ほど前に弟子入りしたのですが、たいへん奥が深いと感動しています。この教室では年齢も職業もさまざまな方たちが真剣に熱い眼差しで蕎麦打ちに取り組んでいます。元々蕎麦は食べるのが大好きでした。4年ほど前にこのお店の蕎麦を初めて食べたとき、これまで食べたことのない食感に驚き感動しました。まさに隠れ家という感じのたたずまいで、お気に入りの癒しの空間の一つでした。お店の方々も温かいので、魂の避難と安息の場であるという感想でした。

よく食べに通っていたところ、壁に掛けられた名札がずらりあることに気づき、なんだろうと聞いてみたところ、『野幌手舞そばの会』という蕎麦打ちの会の参加者の名札でした。お店の方と「自分も興味はあるが、やったことがない」と話をしました。お店のご主人（現在の師匠！）から一度体験してみてもはと誘われ、参加させていただきました。すっかりはまって、その日の内に会員にさせていただきました。私の名札もかかっています。師匠はじめ、会の先輩方から文字通り手取り足取り教えてもらっています。仕事以外で真剣に取り組める時間を持つありがたさを実感しています。今の私の一番のストレス解消法です。

